知的障害児とその保護者の自己決定に関する一考察

田崎真由美（長崎大学大学院教育学研究科）
小島道生　（長崎大学教育学部）

Ⅰ．はじめに

障害のある人の自己決定については、アメリカを中心に広く議論されている。アメリカでは、個別の指導計画に生徒が自己決定の力を獲得するための教育的手立てを組み込むなど、自己決定は基本的な権利のひとつとして認識されている。そして、多くの研究者が障害のある子どもの自己決定を促進させることは、教育や移行計画などにおいて重要な要素であると主張している（Bremer, Kachgal & Schoeller, 2003；Field, Hoffman, 1999；Field, Martin, Miller, Ward, & Wehmeyer, 1998；Wehmeyer, Agran, &Hughes, 2000)。このように自己決定の重要性が指摘され、数多くの自己決定モデルが提案されている(例えば、Abery, 1994)。また、自己決定にかかわるスキルの獲得支援や自己決定カリキュラムも開発されてきている。

近年、日本においてもアメリカを中心とした研究の影響を受けて、その関心は広まってきている。そして、日本の障害児教育の分野でも、自己決定についての研究が徐々に報告されるようになってきた（遠藤, 2002；長澤, 2001；関, 1999；高垣・池本, 2001；手島, 2003)。しかし、わが国においては知的障害児本人の自己決定に対する意識などを明らかにした研究は、ほとんど報告されていない。自己決定に関する本人の意識や願いを明らかにすることは、本人の意思を反映した自己決定の支援方法につなげるためには不可欠と考えられる。また、自己決定力を促進するには、保護者の参加が重要とされている（Field & Hoffman, 1999）にもかかわらず、我が国においては保護者の自己決定に関する認識などについても充分に明らかにされていない。保護者の自己決定に関する認識などを明らかにすることは、家庭生活場面における自己決定支援の在り方について吟味し、より効果的な支援へとつなげられよう。そこで、本研究では知的障害児とその保護者を対象に自己決定について調査を実施し、現状と課題を明らかにする。

Ⅱ．方法

1．予備調査

Wehmeyer(1995)が作成したアーク自己決定尺度の質問項目と村中・藤原(2005)を参考に、知的障害児本人と保護者に尋ねる質問項目を作成した。そして、知的障害児に尋ねる質問項目の妥当性を検証するために、知的障害児２名を対象に、主に質問項目や回答方法の理解のしやすさについて、検討を依頼した。その結果、一部の質問項目について修正された。

また、知的障害児の保護者 2 名および特別支援教育に 10 年以上携わる教員 4 名に対し、知的障害児及びその保護者に尋ねる質問項目の妥当性について、検討を依頼した。その結果、一部の質問項目について修正された。

2. 本調査

(1)対象者

対象となった知的障害児は、A 特別支援学校中学部および高等部に在籍する生徒 15 名であった。保護者は、それら生徒の保護者 15 名であった。知的障害児の生活年齢の平均値、標準偏差を **Table1** に示した。

Table1 対象児の生活年齢および精神年齢

	平均値 (n＝15)	標準偏差	範囲
生活年齢	15：07	1.29	13：03 ～ 17：09
精神年齢	7：04	1.77	4：10 ～ 10：08

(2)調査期間

平成 19 年 10 月上旬から 12 月上旬にかけて実施した。

(3)質問内容

2 回の予備調査を実施し修正を行ったアンケート質問紙を用いて、個別に面接調査を行った。学校・家庭・地域での自己決定機会と自己決定に対する意識を尋ねる 9 つの質問を行った。これら質問に対して、2 件法あるいは 3 件法で回答を求めた。

保護者には、上記の質問紙から学校場面の質問項目を削除し、家庭・地域での子どもの自己決定の機会について 5 つの質問を行った。これら質問に対して、2 件法で回答を求めた。

(4)分析方法

知的障害児の回答と保護者の回答に分けて、結果を算出した。そして、直接確率計算法および χ^2 検定を実施した。

Ⅲ. 結果

1. 知的障害児の自己決定の機会と意識

知的障害児の回答結果の内訳については、Table2～4 に示した。以下、それぞれの質問項目ごとに分析した結果を示す。

Table2　自己決定機会についての知的障害児の回答

	質問 1	2	3	4	5	6	7	8	9
自分で決めた	14 (93%)	6 (40%)	6 (40%)	7 (47%)	12 (80%)	13 (87%)	4 (27%)	15 (100%)	12 (80%)
先生（保護者）が決めた	1 (7%)	9 (60%)	9 (60%)	8 (53%)	3 (20%)	2 (13%)	11 (73%)	0 (0%)	3 (20%)

Table3　自己決定に対する意識についての知的障害児の回答

	質問 1	2	3	4	5	6	7	8	9
自分で決めたい	12 (80%)	8 (53%)	8 (53%)	8 (53%)	11 (74%)	11 (74%)	9 (60%)	13 (87%)	15 (100%)
先生（保護者に）決めてほしい	2 (13%)	2 (13%)	3 (20%)	3 (20%)	2 (13%)	2 (13%)	3 (20%)	2 (13%)	0 (0%)
どちらでもよい	1 (7%)	5 (34%)	4 (27%)	4 (27%)	2 (13%)	2 (13%)	3 (20%)	0 (0%)	0 (0%)

Table4　自己決定の容易さについて知的障害児の回答

	質問 1	2	3	4	5	6	7	8	9
難しい	3 (20%)	3 (20%)	2 (13%)	3 (20%)	1 (7%)	3 (20%)	4 (27%)	3 (20%)	3 (20%)
簡単	11 (73%)	8 (53%)	8 (53%)	6 (40%)	11 (73%)	8 (53%)	10 (66%)	11 (73%)	11 (73%)
わからない	1 (7%)	4 (27%)	5 (34%)	6 (40%)	3 (20%)	4 (27%)	1 (7%)	1 (7%)	1 (7%)

(1)学校場面での自己決定の機会と意識について

①質問1

「今日の休み時間に何をするのか、自分で決めましたか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は 14 名、「先生が決めた」と答えた知的障害児は 1 名であった。直接確率計算法を実施したところ有意であった（p=.01, 両側検定）。

次に、「休み時間に何をするか、自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は 12 名、「先生に決めてほしい」と答えた知的障害児は 2 名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は 1 名であった。χ^2検定を実施した結果、人数の差は有意であり（χ^2 (2)＝14.8, p＜.01)、「自分で決めたい」と答えた知的障害児が有意に多かった。

さらに、「休み時間に何をするか、自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対して「難しい」と答えた知的障害児は 3 名、「簡単」

と答えた知的障害児は 11 名、「わからない」と答えた知的障害児は 1 名であった。χ^2 検定を実施した結果、人数の差は有意であり（χ^2 (2)＝11.2, p＜.01)、「簡単」と答えた知的障害児が有意に多かった。

②質問 2

「文化祭で何をするか、自分で決めましたか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は 6 名、「先生が決めた」と答えた知的障害児は 9 名であった。直接確率計算法を実施したところ有意でなかった（p=.61, 両側検定)。

次に、「文化祭で何をするか、自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は 8 名、「先生に決めてほしい」と答えた知的障害児は 2 名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は 5 名であった。χ^2 検定を実施した結果、人数の差は有意でなかった（χ^2(2)＝3.6, p＞.05)。

さらに、「文化祭で何をするか、自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対して「難しい」と答えた知的障害児は 3 名、「簡単」と答えた知的障害児は 8 名、「わからない」と答えた知的障害児は 4 名であった。χ^2 検定を実施した結果、人数の差は有意でなかった（χ^2(2)＝2.8, p＞.05)。

③質問 3

「学校での掃除場所は、自分で決めましたか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は 6 名、「先生が決めた」と答えた知的障害児は 9 名であった。直接確率計算法を実施したところ有意でなかった（p=.61, 両側検定)。

次に、「学校での掃除場所を、自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は 8 名、「先生に決めてほしい」と答えた知的障害児は 3 名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は 4 名であった。χ^2 検定を実施した結果、人数の差は有意でなかった（χ^2(2)＝2.8, p＞.05)。

さらに、「学校での掃除場所を自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対して「難しい」と答えた知的障害児は 2 名、「簡単」と答えた知的障害児は 8 名、「わからない」と答えた知的障害児は 5 名であった。χ^2 検定を実施した結果、人数の差は有意でなかった（χ^2(2)＝3.6, p＞.05)。

④質問 4

「クラスで何の係りをするか、自分で決めましたか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は 7 名、「先生が決めた」と答えた知的障害児は 8 名であった。直接確率計算法を実施したところ有意で

なかった（p=1.00，両側検定）。

次に、「クラスで何の係りをするか、自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は 8 名、「先生に決めてほしい」と答えた知的障害児は 3 名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は 4 名であった。χ^2検定を実施した結果、人数の差は有意でなかった（$\chi^2(2)=2.8$，$p>.05$）。

さらに、「クラスで何の係りをするか自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対して「難しい」と答えた知的障害児は 3 名、「簡単」と答えた知的障害児は 6 名、「わからない」と答えた知的障害児は 6 名であった。χ^2検定を実施した結果、人数の差は有意でなかった（$\chi^2(2)=1.2$, $p>.05$）。

（2）家庭場面での自己決定の機会と意識について

①質問5

「休みの日に何をするか、自分で決めましたか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は 12 名、「お父さんやお母さんが決めた」と答えた知的障害児は 3 名であった。直接確率計算法を実施したところ有意であった（p=.04，両側検定）。

次に、「休みの日に何をするか、自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は 11 名、「お父さんやお母さんに決めてほしい」と答えた知的障害児は 2 名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は 2 名であった。χ^2検定を実施した結果、人数の差は有意であり（$\chi^2(2)=10.8$，$p<.01$）、「自分で決めたい」と答えた知的障害児が有意に多かった。

さらに、「休みの日に何をするか、自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対して「難しい」と答えた知的障害児は 1 名、「簡単」と答えた知的障害児は 11 名、「わからない」と答えた知的障害児は 3 名であった。χ^2検定を実施した結果、人数の差は有意であり（$\chi^2(2)=11.2$, $p<.01$）、「簡単」と答えた知的障害児が有意に多かった。

②質問6

「お休みの日にどんな服を着るか、自分で決めましたか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は 13 名、「お父さんやお母さんが決めた」と答えた知的障害児は 2 名であった。直接確率計算法を実施したところ有意であった（p=.01，両側検定）。

次に、「お休みの日にどんな服を着るか自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は 11 名、「お父さんやお母さんに決めてほしい」と答えた知的障害児は 2 名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は 2 名であった。χ^2検定を実施した結果、

人数の差は有意であり（$\chi^2(2)=10.8$, $p<.01$）、「自分で決めたい」と答えた知的障害児が有意に多かった。

さらに、「休みの日にどんな服を着るか自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対し「難しい」と答えた知的障害児は3名、「簡単」と答えた知的障害児は8名、「わからない」と答えた知的障害児は4名であった。χ^2検定を実施した結果、人数の差は有意でなかった（$\chi^2(2)=2.8$, $p>.05$）。

③質問7

「おうちでどんなお手伝いをするか、自分で決めましたか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は4名、「お父さんやお母さんが決めた」と答えた知的障害児は11名であった。直接確率計算法を実施したところ有意でなかった（p=.12, 両側検定）。

次に、「おうちでどんなお手伝いをするか、自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は9名、「お父さんやお母さんに決めてほしい」と答えた知的障害児は3名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は3名であった。χ^2検定を実施した結果、人数の差は有意でなかった（$\chi^2(2)=4.8$, $p>.05$）。

さらに、「おうちでどんなお手伝いをするか、自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対して「難しい」と答えた知的障害児は4名、「簡単」と答えた知的障害児は10名、「わからない」と答えた知的障害児は1名であった。χ^2検定を実施した結果、人数比率の差は有意であり（$\chi^2(2)=8.4$, $p<.05$）、「簡単」と答えた知的障害児が有意に多かった。

(3)地域場面での自己決定の機会と意識について

①質問8

「自動販売機でジュースを買うとき、何を飲むか自分で決めますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は15名、「お父さんやお母さんが決めた」と答えた知的障害児は0名であった。

次に、「自動販売機でジュースを買うとき、何を飲むか自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は13名、「お父さんやお母さんに決めてほしい」と答えた知的障害児は2名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は0名であった。項目の中に0が含まれていたので、χ^2検定を実施しなかった。

さらに、「自動販売機でジュースを買うとき、何を飲むか自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対して「難しい」と答えた知的障害児は3名、「簡単」と答えた知的障害児は11名、「わからない」と答えた知的障害児は1名であった。χ^2検定を実施した結果、人数比率の差は有意であり（$\chi^2(2)=11.2$, $p<.01$）、「簡単」と答えた知的障害児が有意に多かった。

②質問9

「レストランでご飯を食べるとき、何を食べるか自分で決めますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めた」と答えた知的障害児は12名、「お父さんやお母さんが決めた」と答えた知的障害児は3名であった。直接確率計算法を実施したところ有意であった（p=.04，両側検定）。

次に、「レストランでご飯を食べるとき、何を食べるか自分で決めたいと思いますか。」という質問を行った。これに対して「自分で決めたい」と答えた知的障害児は15名、「お父さんやお母さんに決めてほしい」と答えた知的障害児は0名、「どちらでもいい」と答えた知的障害児は0名であった。項目の中に0が含まれていたので、χ^2検定を実施しなかった。

さらに、「レストランでご飯を食べるとき、何を食べるか自分で決めるのは難しいですか。」という質問を行った。これに対して「難しい」と答えた知的障害児は3名、「簡単」と答えた知的障害児は11名、「わからない」と答えた知的障害児は1名であった。χ^2検定を実施した結果、人数比率の差は有意であり（$\chi^2(2)=11.2$，$p<.01$）、「簡単」と答えた知的障害児が有意に多かった。

2. 子どもの自己決定機会に関する保護者の認識

(1)家庭・地域場面での子どもの自己決定の機会について

①質問1

「お休みの日にどんな服を着るか、自分で決めますか。」という質問を行い、「子どもが自分で決める場合が多い」と答えた保護者は11名、「お父さんやお母さんが決める場合が多い」と答えた保護者は4名であった。直接確率計算法を実施したところ有意でなかった（p=.12，両側検定）。

②質問2

「休みの日に何をするか、自分で決めますか。」という質問を行った。これに対して「子どもが自分で決める場合が多い」と答えた保護者は11名、「お父さんやお母さんが決める場合が多い」と答えた保護者は4名であった。直接確率計算法を実施したところ有意でなかった（p=.12，両側検定）。

③質問3

「おうちでお手伝いをするか、自分で決めますか。」という質問を行った。これに対して「子どもが自分で決める場合が多い」と答えた保護者は10名、「お父さんやお母さんが決める場合が多い」と答えた保護者は5名であった。直接確率計算法を実施したところ有意でなかった（p=.30，両側検定）。

④質問4

「自動販売機でジュースを買うとき、何を飲むか自分で決めますか。」とい

う質問を行った。これに対して「子どもが自分で決める場合が多い」と答えた保護者は15名、「お父さんやお母さんが決める場合が多い」と答えた保護者は0名であった。

⑤質問5

「レストランでご飯を食べるとき、何を食べるか自分で決めますか。」という質問を行った。これに対して「子どもが自分で決める場合が多い」と答えた保護者は15名、「お父さんやお母さんが決める場合が多い」と答えた保護者は0名であった。

Ⅳ. 考察

1. 知的障害児の自己決定の機会と意識

(1)学校場面での自己決定の機会と意識について

休み時間の過ごし方や学校行事場面、掃除場面、学級活動場面での具体的場面を提示し、対象児の自己決定機会を尋ねた。その結果、休み時間の過ごし方について「自分で決めた」と回答した対象児は有意に多かった。調査を行ったA特別支援学校には生徒が使用できるカラオケ機やゲーム機、パソコンがあり、各教室には書籍やCDプレーヤが揃えられている。また、遊戯室や校庭にもさまざまな教具や遊具が準備されている。したがって、本研究の対象児は自己決定しやすい環境が整っていたことより、自分で決めたという回答が多くなったと考えられる。しかし、知的障害児・者の余暇活動は、活動について意思表明・自己決定をする機会が少ない(是枝・羽地・小林，2000) という報告されている。Abery(1994)も指摘しているように、知的障害児の自己決定には学校の環境が影響してくる。したがって、知的障害のある生徒が自己決定しやすい環境作りを目指すべきである。また、学校行事場面、掃除場面、学級活動場面においては、有意差がなかった。これらは、休み時間の過ごし方に比べて、知的障害児にとって自己決定をしにくい場面であると考えられる。

休み時間の過ごし方について「自分で決めたいと思っている」と回答した対象児は、「先生に決めてほしい」、「どちらでもいい」と回答した対象児よりも有意に多かった。知的障害がある人には自己決定ができないとする考えが根強い（小林，2000）とされているが、本研究結果から障害がある人自身も「自分で決定したい」と思っていることが明らかとなった。

(2)家庭場面での自己決定の機会と意識について

休みの日の過ごし方、服の選び方、家庭での手伝いについて具体的場面を提示し、対象児の自己決定機会を尋ねた。その結果、休みの日の過ごし方と服の選び方について「自分で決めた」と回答した対象児は有意に多かった。

先行研究（是枝・羽地・小林,2000）では、知的障害児・者の余暇活動は、活動について意思表明・自己決定をする機会が少ないという報告されている。こうした研究結果の違いは、本研究から明白にはできないが、休みの日の過ごし方について知的障害児自身で決めていることが明かとなった。また、家庭での手伝い場面において有意差はなかった。知的障害児にとって、家庭での手伝いは、休みの日の過ごし方および服の選び方に比べて自己決定することが難しいと考えられる。

また、休みの日の過ごし方について「自分で決めたいと思っている」と回答した対象児は、「お父さんやお母さんに決めてほしい」、「どちらでもいい」と回答した対象児よりも有意に多かった。学校場面の余暇活動と同じく、自分で決めたいと考えている対象児が多いことが示唆された。西崎(1997)は、親や家族が結果として満足できる生活スタイルを選択してくれることよりも、障害児が決定のプロセスへの主体としての参加を望んでいると述べている。したがって、知的障害児本人の自己決定したいという意識を大切にし、自己決定のプロセスに積極的に参加していくことが重要だと考えられる。

(3)地域場面での自己決定の機会と意識について

特に飲料水の買い物場面と食事のメニュー選択場面において、知的障害児が主体的に自己決定を行う機会が多いことが示唆された。これは、長澤（2001）も指摘しているように、食べることは基本的欲求のひとつであり、必要不可欠の行動であるため、その欲求を満たすために自分で決める場合が多いと考えられる。また、対象児全員が、食事場面において「自分でメニューを選びたい」と回答した。このことからも、知的障害児において基本的欲求は自己決定しやすいと考えられる。

2. 子どもの自己決定機会に関する保護者の認識

家庭や地域での自己決定の具体的場面を示し、質問を行った。質問紙に設定された具体的場面のなかでも、食事やジュースについて、ほとんどの保護者は「子どもが自分で決めることが多い」と回答していた。根岸（1998）は、保護者が子どもの希望や意志を家庭生活の中でどのように取り上げ、尊重しているかを調査した。その結果、希望は尋ねるが最終的に保護者が決定するという回答が最も多く、家族や保護者によって生活上のさまざまな部分が決定されていると報告している。本調査ではこの結果とは異なり、保護者は子どもの自己決定を尊重し、自主的に選択する機会を重視していることが示唆された。

V. 文献

Abery, B.(1994)A conceptual framework for enhancing self-determination. In M.F. Hayden & B. Abery (Eds.), *Challenges for a service system in*

transition. Brookes, Baltimore, MD, 345－380.
Bremer, C., Kachgal, M., Schoeller, M. (2003) Self-Determination: Supporting Successful Transition. *Research to Practice Brief*, 2 (1), 1－8.
千葉伸彦 (2003) 障害のある人の自己決定 ―重度知的障害者支援に関する一考察―. 東北福祉大学大学院総合福祉学研究科社会福祉学専攻紀要, 1, 62－67.
遠藤美貴 (2002) 知的障害をもつ人の自己決定力を高めるための支援のあり方に関する一考察. 香川県明善短期大学研究紀要, 33, 57－68.
Field, S., &Hoffman, A. (1999) The importance of family involvement for promoting self-determination in adolescents with autism and other developmental disabilities. *Focus on Autism and Other Dvelopmental Dsabilities*, 14 (1), 36－41.
Field, S., Martin, J., Miller, R., Ward, M., & Wehmeyer, M. (1998) Self-Determination for persons with disabilities: A position statement of the division on career developmental and transition. *Career Development for Exceptional Individuals*, 21, 113－128.
羽地弘・是枝喜代治・小林芳文 (2000) 知的障害児者の余暇活動に関する研究 (5) ～記述によるアンケートから～. 日本特殊教育学会第 41 回大会発表論文集.
小林博 (2000) 知的障害者の自己決定–その根源と実践–.「施設変革と自己決定」編集員会 (編)「権利としての自己決定：そのしくみと支援」, 21-42, エンパワメント研究所.
村中智彦・藤原義博 (2005) 家庭における知的障害者の選択決定の機会についての検討. 発達障害研究, 27 (1), 46－62.
長澤正樹 (2001) 重度知的障害のある児童生徒を対象とした自己選択の実態－養護学校における食事と遊び場面に基づく調査研究－. 発達障害研究, 23 (1), 54－62.
西崎博子 (1997) 知的障害者の「自己決定と本人参加」についての家族の意識. ノートルダム清心女子大学紀要, 24 (1), 119－130.
根岸洋人 (1998) 精神遅滞者の自己決定をめぐる課題―家族と施設職員の意識調査から―. 東洋大学児童相談研究, 17, 53－63.
関　和典 (1999) 自己決定を促す支援のあり方について―算数科「かずあそび」の実践を通して―. 広島大学研究紀要, 145－150.
高垣隆治・池本喜代正 (2001) 自己選択・自己決定の力を育む授業 ―知的障害養護学校の作業学習を通して―. 宇都宮大学教育学部教育実践センター紀要, 24, 186－196.
手島由紀子 (2003) アメリカ合衆国の障害児教育における自己決定の展開. 特殊教育学研究, 41 (2), 245－254.
Wehmeyer, M. L., & Kelchner, K. (1995)The Arc's Self-Determination Scale: Procedural Guidelines. Arlington, TX : The Arc.